



新藤兼人賞

SHINDO KANETO AWARDS



第 13 回新藤兼人賞

2008 年 12 月 5 日（金）東京會舘 11 階 ゴールドルーム

主催：協同組合 日本映画製作者協会

特別協賛：富士フイルム株式会社／報映産業株式会社

協賛：松竹株式会社／東宝株式会社／東映株式会社／角川映画株式会社

コダック株式会社／株式会社 I M A G I C A／株式会社ファンテック

SARVH 賞提供：一般社団法人 私的録画補償金管理協会

金 賞

小林聖太郎『かぞくのひけつ』監督・脚本



受賞者プロフィール 1971年生まれ。大阪府出身。94年関西大学法学部政治学科卒業後、ジャーナリスト今井一の助手を務め「阪神大震災の被災者にラジオ放送は何ができたか」「大震災 100人の瞬間」「大事なことは国民投票で決めよう」などの取材、執筆に協力する。95年、原一男監督が開いた「CINEMA 塾」に第一期生として参加。96～98年にかけて同監督のTVドキュメンタリー「映画監督 浦山桐郎の肖像」の助監督を務める。その後、劇映画の演出部として「ナビィの恋」(98)「ホテルハイビスカス」(02)(中江裕司監督)、「閉じる日」(00)「えんがわの犬」(00)(行定 勲監督)、「ぷりていウーマン」(02)(渡邊孝好監督)、「ゲロッパ!」(02)「パッチギ!」(04)(井筒和幸監督)、「ニワトリはハダシだ」(03)(森崎東監督)、「69 sixty-nine」(03)(李相日監督)、「リンダリンダリンダ」(04)(山下敦弘監督)、「雪に願うこと」(05)(根岸吉太郎監督)など多くの映画製作に関わる(カッコ内は撮影年度)。本作で第47回日本映画監督協会新人賞受賞。

銀賞

森 義隆『ひゃくはち』監督・脚本



受賞者プロフィール 1979年生まれ。埼玉県出身。99年初の短編映画「壘の桃源郷」がBOX東中野にてレイトショー公開、函館イルミネーション映画祭正式招待、水戸短編映像祭審査員奨励賞、「Movies-High」観客賞受賞。翌年、インドを舞台にした「カル」はP J映画祭グランプリ、インディーズムービーフェスティバル入賞など。

01年テレビマンユニオン入社。「世界ウルルン滞在記」(MBS)等の製作に関わり、「ガイアの夜明け」(TX)「わたしが子供だったころ」(NHK BS-Hi)ほか各局のドキュメンタリー番組を中心に演出。

SARVH

プロデューサー賞

中沢敏明/本木雅弘『おくりびと』プロデューサー



受賞者プロフィール

中沢敏明

株式会社セディックインターナショナル・代表取締役。

1947年生まれ、山梨県出身。大学卒業後、三船プロダクションに入社。ドイツ支社長を経て映画製作に携わる。82年からセゾングループで映画を製作。95年、株式会社セディックインターナショナルを設立。80本を超える映画作品を企画&プロデュースしている。手がけた主な映画作品は、『無能の人』(83)、『岸和田少年愚連隊』(95)、『中国の鳥人』(98)、『双生児』(99)、『顔』(01)、『カタクリ家の幸福』(02)、『SABU〜さぶ』(02)、『あずみ』(03)、『NANA』(05)、『蟬しぐれ』(05)、『あらしのよるに』(05)、『日本沈没』(06)、『スキヤキ・ウエスタン ジャンゴ』(07)、『闇の子供たち』(08)、『おくりびと』(08)など。

本木雅弘

65年生まれ。埼玉県出身。81年TVドラマ「2年B組仙八先生」(81-82)でデビュー。『226』(89)で日本アカデミー賞新人俳優賞受賞、

『シコふんじゃった。』(91)で同賞最優秀主演男優賞、『ラストソング』(94)で東京国際映画祭最優秀主演男優賞など受賞歴多数。その後も『双生児〜GEMINI〜』(99)、『スパイ・ゾルゲ』(03)などに出演、『鉄コン筋クリート』(06)では声優にも挑戦。09年秋より、NHKスペシャルドラマ「坂の上の雲」で主役を務める。

金賞・銀賞選考委員講評

審査委員長：李 鳳宇（シネカノン）

本年度の新藤兼人賞は、私が審査委員長を担当させて頂いて以来、本来の評価基準である「作家のオリジナリティー」が前面に押し出された年だったように思います。金賞に輝いた小林聖太郎氏の「家族のひげつ」は自身のルーツや主人公を取り巻く周辺の人々を暖かい眼差しで捉えた秀作でした。そして、銀賞に選ばれた森義隆氏「ひゃくはち」は独自の視点で高校野球に打ち込む高校生たちの日常をリアルに、そして鮮やかに映し出した斬新な作品でした。今年の審査の過程では独自性という観点では他にも万田邦敏監督「接吻」、熊坂出監督「パーク アンド ラブ ホテル」、そして作品の話題性や監督としての将来性については李闘士男監督「デトロイトメタルシティ」、中西健二監督「青い鳥」などが挙げられ多くの議論をたたかわせました。金賞に輝いた作品は劇場公開年度としては対象ギリギリでしたし、劇場公開作品としては圧倒的に不利な規模での公開でしたが、小林聖太郎氏の将来性と、彼の描く世界観の広がりを感じて、審査員一同満場一致をもって決めました。今年の審査結果が今後の日本映画のひとつの方向性に繋がれば幸いです。

佐々木史朗（オフィス・シロウズ）

「かぞくのひげつ」と「ひゃくはち」はどちらが金賞、銀賞であってもよいと思えるほどの面白い作品でした。笑いにまぶしながら実は家族の奥深い問題を、さりげなく提示してみせた小林君、今まであまり見たことのない高校生を類型でなくリアルに造形してくれた森君、といずれも私たち年配の人間が忘れがちな、世界の見方を思い出させてくれて新鮮でした。こういう映画は私たちを励ましてくれます。お二人に感謝とお祝いを。

安田匡裕（エンジンネットワーク）

小林聖太郎監督は人間にただならぬ興味を抱いている人に違いありません。何と言っても新人監督に望むのはまずはこのことです。「かぞくのひげつ」を観ながら私は久しぶりに口元が緩みました。おもしろい人達がたくさん出てくる映画を近々彼とは作ってみたいなああと強く意識しました。「ひゃくはち」の森義隆監督にも同じ「しるし」があるように思えました。映画そのものは荒削りで、まだまだこれからでしょうが、人間を見る眼は確かです。この先、きっと文学には描き切れない人間を映画に登場させてくれることでしょうか。次回作もオリジナルの脚本でしっかり構想を練り、二人揃って、世間をあっと言わせるような映画を作ってほしいものです。本当に今年の新藤兼人賞の二人には期待が大きいのです。

榎井省志（アルタミラピクチャーズ）

小林聖太郎監督の「かぞくのひげつ」は、映画全盛期に作られ人々を笑いに包んだ人情喜劇の名作を彷彿とさせ、輝かしい映画の未来を予感させる一本でした。主人公の久野雅弘をはじめ、顔に似合わず女にモテる主人公の父親役の桂雀々、父親の恋人役のちすんなど配役も素晴らしかった。既に日本映画監督協会新人賞を受賞しているお墨付きの作品でしたので、敢えて新藤兼人賞を授賞しなくても思いましたが、プロデューサーとして組んでみたいと思わせる才能豊かな人材だと思いました。そして森義隆監督の「ひゃくはち」は野球シーンがとても臨場感に溢れていて素晴らしかった。また甲子園を夢見る補欠選手たちの辛さや喜びを丹念に描いている点に注目しました。その誠実で丁寧な作品作りは新人監督とは思えぬ力量を感じました。二人とも撮影現場での助監督経験やドキュメンタリー番組の演出の経験を十分に活かし、それぞれの思いを込めて作品を作り上げた点を評価したいと思います。今後もこの蓄積を踏まえた上で次回作に取り組んで貰えたらと期待します。

SARVH プロデューサー賞選考委員講評

新藤次郎（近代映画協会）日本映画製作者協会 代表理事

本年のSARVH賞は中沢敏明氏と本木雅弘氏が日本映画製作者協会理事会に於いて選出された。映画「おくりびと」の成功を導いた企画とプロデュースを評価したものです。地味な素材である「納棺師」を見事な感動作に仕上げていることは、“素材の発見”と“映画に成ることの発見”があっただけと思われ。本木雅弘氏が十数年来温めてきた素材を中沢敏明氏が嗅覚と豊富な経験を駆使して劇場用映画として成立させた。成功した映画を後に分析すれば幾多の理由があるが、事前に其の全てを感知することは不可能だろう。両氏に確信があったかは不明だが、自信は存在したのだろう。中沢敏明氏は本映画にプロデューサーとしてクレジットがあるが本木雅弘氏は俳優としてのクレジットのみである。今回プロデューサーを対象とするSARVH賞にお二人を選出したのは企画発案とプロデューサー実務が本映画成功に欠かせないものだったと認識するからに他ならない。今後も“どこか新しく”“どこか違う”映画を創作することを期待します。